

## 西スマトラ州における日本語専攻大学生のビリーフに関する研究

**Mauddudul Haq<sup>1</sup>**

<sup>1</sup>Program Studi Pendidikan Bahasa Jepang, Universitas Negeri Padang

### **Abstract**

*In this research, adapted version of BALLI was employed to analyze belief of Japanese language learners in West Sumatera universities. This research was conducted in universities in West Sumatera provinces due to the highest numbers of Japanese language learners outside of provinces in Java Island. Questionnaire included BALLI, informant background information and open ended question to find out learners beliefs. Informants were divided into 2 groups; 1 year students and senior students.*

*Japanese learners in West Sumatera universities beliefs that, a person who has talent or special ability in learning foreign language can easily master a language. They also belief that everyone can learn a language, so that special ability wasn't necessary in order to learn new language. Many Japanese learners were attracted by Japanese sub-culture to learn Japanese language. 1 year students group beliefs that 1 or 2 years is enough to become proficient in Japanese language eventhough you only studied 1 hour a day. Therefore they underestimated the difficulty of Japanese language. Senior students in the other hand, belief that Japanese language is difficult due to their experience in classroom. 1 year students group also said that they satisfied with their current language learning, but majority of senior students haven't satisfied because they think they haven't met their expectation in language learning yet.*

*Keywords: belief, japanese language, language learning*

### **I. はじめに**

国際交流基金 (2013) の調査『2012年度 日本語教育機関調査』によれば、インドネシアにおける日本語教育機関・教師・学習者の数は、2009年度の調査結果と比べて急増している。学習者数は、2009年に716,353人であったものが2012年に872,411人に増加した。これは、東南アジア諸国の中では一番多く、中国に続いて世界第二位である。学習者数のうち、90%以上が中等教育段階であり、その人数は世界第一位となっている。大学などの高等教育機関における日本語学習者数は2009年度比べると12.2%増えて、2012年に22,081人となっている。

なぜ、こうした日本語教育の興隆が起こっているのだろうか。古川 (2007) が明らかにしたところによれば、インドネシアにおける日本語教育の背景にあるものは、インドネシアに投資する日本企業が多くなり、また、アニメや漫画やコスプレなどのポップカルチャーや音楽などの大衆文化、回転ずしや、弁当などの食文化などが、都市部を中心として一般に受け入れられていることが大きいということである。次に、長期間にわたって、多くの派遣専門家により日本語教育が行われ、そこで現在の日本語

教育を担う人々が育成されてきている。そこにおける JICA を初めとした開発援助、災害援助のつながりは非常に強い。観光業から見た日本とのつながりは特にバリ島を中心としている。それら政治面、経済面での日本との関係も深いということも、日本語教育興隆の一要因であるといえるだろう。このように、インドネシアにおける日本語教育学習者数の増加は、特筆すべきものである。また、日本語学習に関する需要が高まっていることがわかった。そのため、インドネシアの日本語学習者の期待に応えるために、様々な視点からの研究が重要になってきている。

というのも、インドネシアの第二外国語の教師が教えていると、自分のクラスの中には、優秀な学習者だけでなく、学習についていけない学習者に遭遇することが非常に多い。むしろ、他の科目にもその状況が遭遇する可能性がある。しかし Fujiwara によれば、言語学習においては、学習者のグループの間の能力は大きい隔たりがあって、他教科に比べてより観察されやすいものと考えられている (Fujiwara, 2012)。「成功する言語学習者はどんな資質を持つのか」、「いくつかの言語学習者は他の言語学習者より言語を速く学んだことができる可能にしたことは何だろう」、こういう質問は言語学習における個人差についての初期の先駆的な研究で焦点となっている (Gardner and Lambert, 1972 cited in Riley, 2006)。言語学習の場合、生徒たちの学習戦略や態度や動機や信念が異なっている (Horwitz, 1988)。この個人差は言語学習者の行動に影響しうるため、言語教師や研究者たちは、生徒たちの学習戦略や態度や動機や信念を研究することが重要だと考えてきた。態度、動機、感情、不安、そして信念は、すべての言語学習における情動的成分と呼ばれ、これらの質問に答えるために、また言語学習における成果の個人差を理解するために重要である (Ellis 1994)、(Henter 2014)。言語学習における情動的成分は、認知能力より、少なくとも、また言語学習に大いに貢献した (Stern, 1993 cited in Riley, 2006)。学習者の動機、学習戦略、期待といった学習者のさまざまな要因の把握が重要視されているが、ビリーフは、そのうち、学習戦略に影響を与えるものとして注目されている (Riley, 2006)。教師と言語学習者でビリーフにはずれがあり、ビリーフが学習者の習得や学習戦略に影響を及ぼし、効果的な言語教育を行うために、教師は言語学習者のビリーフを把握しておく必要があるとされている (Peacock, 1999)。それに加えて、言語学習における言語学習者の動機と態度は言語学習者を持っている信念に大きく影響される (Riley, 1996 ; MacIntyre, 2000)。

「言語学習における信念は、言語学習について双方の学習者と教師の概念と期待を伴う。言語学習における信念の研究は、Horwitz 以来行われてきた言語学習者や教員のビリーフを査定する論文を発表した」。専門家たちは、これら言語学習における信念のことを「ビリーフ (Belief)」と呼んでいる。最近 20 年間に、言語学習に関する学習者のビリーフを広範囲に調査することになった。ビリーフといのは、個人が大切にして、変化に対する耐性になっている個人や主観的理解として記載されている (Alexander and Dochy, 1995)。Horwitz によると、言語学習におけるビ

リーフというのは、「明確な視点」と第二外国語学習を学習することができる最善の方法についての「先入観」のことを説明された (Horwitz1985, 1988)。

第二外国語学習に関してビリーフの先駆的な研究は、Horwitz による、Texas 大学におけるドイツ語、仏語、スペイン語学習者を持っているビリーフを研究である (Horwitz1988)。研究の結果は、多く外国語学習者は、一般的に、言語学習の教員を持っているものとは異なるビリーフを持ったことを明らかにした (Horwitz, 1988)。Horwitz (1985, 1988, 1999) は、個人の言語学習者は、いかに言語を学ぶかについて、異なるビリーフを持つ。生徒にも、教師にもビリーフがあり、それらの性質は異なっている。ビリーフは、言語学習方法論と生徒・教師のふるまいに影響を与えていると考えられている。このことから Horwitz (1985, 1988, 1999) は、学習者の方法論を追求する前に、ビリーフを理解することのほうが重要であることを示唆している。授業法や教室内の活動が、学生のビリーフと一致せず、授業が学生者の期待に応えていない場合は、到達度が限られる可能性がある。ビリーフは学習者の習得や学習戦略に影響を及ぼし、したがって、教師が学習者のビリーフを把握することが重要である (Horwitz, 1988)。また、生徒のビリーフを教師が理解していなければ、疑念を抱かせたり (Peacock, 1999)、学習をあきらめたり (Ellis, 1996)、言語の不安のもと (Young, 1991) になる。

第二外国語学習におけるビリーフ研究の中で、日本語学習に関する研究はまだ少ない。また、もう一つの問題は、インドネシアを対象としたビリーフの研究はされていないということである。近年、日本語学習者が増加しているため、研究の需要は非常に高い。

首都ジャカルタとジャワ島の新興産業都市だけではなく、他の地域にも、たとえば西スマトラ州では日本語学習者数が増えてきた。そこで学生のビリーフをひとまず知ることが重要になってくる。インドネシアの日本語教育は、中学生から大学生段階まで行われているが、筆者が調査を行い、調査票を配布した際、選択式回答に加え、自由記述欄などで、一定水準以上の質的な回答が得られることを期待して、大学生をターゲットとして設定した。また、ビリーフの基本的な考え方は、先行研究を総合して定義を行った。

そこから導かれた本研究における基本的なビリーフの定義を、「インドネシア西スマトラ州における高等教育学生の日本語学習上のふるまいに影響を与えていると考えられる、日本語教育に対する理念、態度、動機、学習戦略」と定めたい。Horwitz は、教師と生徒を調べているが、本研究では時間の都合もあり、生徒を 1 年生と 2-4 年生の二つグループに分け、対象を絞る。

これら研究の背景を総合すると、インドネシアは、日本語学習に関する需要が高まっていることが分かった。その需要は、首都ジャカルタと新興産業都市だけではなく、他地域にも特に西スマトラ州では日本語学習者数が増えてきて、日本語学習に関する需要が高まっている。この状況をみる

と、インドネシアの日本語学習者の期待に応えるために、インドネシアにおける日本語教育に関して研究することが重要だと考えられる。また、ビリーフという言語学習に関する感情や信念は、言語学習の成果に非常に影響されることが先行研究からわかった。

本研究は、インドネシアの西スマトラ州の日本語学科にある4つ大学に行く。2014年の3月に行って、201名の日本語学習者が調査に参加し、対象する日本語学習者は、1年生のグループと2-4年生のグループに2つグループ分かれる。本研究における調査方法は3つあり、個人情報、先述したBALLI質問、また自由記述質問票である。

本研究では、これまで行われていなかったインドネシアの日本語専攻大学生を対象した言語学習ビリーフ調査の報告である。研究目的は以下の2つについて日本語学習におけるビリーフに着目して考察する。

研究目的 (1) 西スマトラ州の大学生の日本語学習者 (1年生と2-4年生) がどのような言語学習ビリーフを持っているかを明らかにする。研究目的 (2) 西スマトラ州の日本語学習者 (1年生と2-4年生) のビリーフの変化を明らかにする。

## II. ビリーフの先行研究

### (1) 言語学習に関するビリーフ

1970年代以降、言語教育の分野において、言語学習について学習者が持っている信念・言語学習観 (ビリーフ) を明らかにする研究が盛んに行われている。言語学習のビリーフというのは、言語学習に関しての言語学習者の意見、考え方、信念のことである (Horwitz 1988)。言語学習はどのように学習すべきか、言語学習者どのようなものであるかといった、言語学習者に関しての意見のことである (片桐 2007)。

外国語と第二言語学習に関するビリーフ調査は、これまで、さまざまな観点から多くの調査が行われているが、その多く、Horwitz (1988) において開発したBALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) を参考している。Horwitz は、言語学習難易度、言語学習の適性、言語学習性質、学習とコミュニケーション・ストラテジー、言語学習の動機の5領域についてアメリカのTexas大学における英語を第2の言語として学習する (ESL) 大学生と外国語を学習する大学生を対象にビリーフ調査を行い、その結果から、学習者のビリーフをもっていること、教師と学習者でビリーフにずれがあるものこと、ビリーフが学習者の習得や学習ストラテジーに影響を及ぼしていることなど明らかにした。Horwitz がBALLIを開発した後、いくつかの言語学習に関するビリーフ研究がHorwitzが開発したBALLIを使用している。また、他の研究者は、言語学習者のビリーフと他の変数、例えば、不安、学習者の戦略、態度、ビリーフの安定性、学生の文化的背景、学習成果の関係を明らかにするために研究した。

Young (1991)、Truit (1995)、Oh (1996) は、言語学習におけるビリーフと学習者の不安定の関係について研究した。Youngによると、言語学習に関するビリーフは、言語の不安定に影響する主な原因の一つと考えら

れている (Young, 1991)。それは、文法や発音で正しさの重要性について、または言語学習の必要時間の長さについての非現実的なビリーフを持っている場合は、言語学習不安になる可能性が高くなる。Truit は、言語学習の難易度と言語学習の能力に対する自身の欠如というの、言語学習の不安の原因である (Truit, 1995)。また、言語学習者の不安定を軽減するために、言語学習に関する現実的な予想について、教師と学習者が相談することが重要だと考えられている (Oh, 1996)。言語学習の戦略については、言語学習について最も大切なのは、語彙、文法、また自国語からの翻訳することで、同様に言語学習に関して暗記ばかりだというビリーフを学習者が持っている場合、語彙と文法と翻訳の学習に偏りすぎてしまう傾向がでてきてしまい、他の学習方法を無視してしまうことがある (Yang, 1999)。次は、言語学習の成果について、Peacock (1999) の調査で、BALLI の調査の 4 つの項目と学習者の言語能力との強い相関関係が明らかになった。上級の言語学習者は、「正しく言えるようになるまでは何も言っはいけない」、「初級の学習者が間違いを許されたら後で正しく話すのは難しい」、「言語学習に最も重要なのは、文法の学習」というビリーフをもっている学習者が少ない。一方、平均の言語能力が低いグループが、日本語学習の困難さについて、過小評価する可能性が高くなる。

以上の先行研究から、言語学習に関するビリーフは、言語学習者に影響を与えていることが明らかとなった。

## (2) 言語学習のビリーフの安定性

ビリーフの性質について、Pajares の調査結果によると、学習者のビリーフは変化に抵抗することがわかった (Pajares, 1992)。成人期に変化するビリーフというのは珍しいことだと Pajares が指した。しかし、他の先行研究をみると、学習者のビリーフは変更することができると明らかになった。アメリカにおける仏語学習者の 288 名を対象する Kern は、学習者のビリーフと教師のビリーフを比較し、また、一学期 (15 週間) にわたって学習者のビリーフの安定性について明らかにしている。グループ全体か個人かよって異なる結果が出た。グループ全体としての結果は、予備テストと事後テストの調査結果から、学習者の安定性を見られた。一方、個人の結果について、予備テストと事後テストから BALLI の回答が、35% - 59% の回答が変わったという結果が出た (Kern, 1995)。Oh (1996) は、アメリカ大学で日本語を学習している大学生の一年生と二年生のビリーフを比較した。その調査結果から、2 年生は BALLI の項目に賛成する傾向があることがわかった。言語学習の困難さについて、アメリカ大学の日本語学習者の 2 年生は、言語学習に必要な時間について、上手になるまで長く時間がかかると考えているという結果が出た。また、1 年生より、2 年生が文法学習に対すると発音の大切さに賛成する学習者が多いことがわかった。この研究で観察された 1 年生および 2 年生のビリーフの差異は、時間の経過とともに変更される場合があるというビリーフの概念をサポートすることができると考えられる。Oh (1996) と Kern (1995) の研究が示唆したように、学習者のビリーフは、時間の経過のとともに変わる場合もあることが明らかになった。

### (3) 日本語学習におけるビリーフ研究

日本語教育におけるビリーフは 2000 年代に入ってその概念が定着し、研究が盛んになってきた。

板井(2000)は、中国入学者に適した授業法および教室活動を特定することを目的として、香港 4 大学の大学生および日本教師と中国人教師に対して中国語版 BALLI を実施している。その質問項目は言語学習の性質、コミュニケーション・ストラテジー、教師の要求、媒介語の 4 領域にわたる。片桐(片桐 2005)はフィリピン大学の日本語学習者の 156 名に対し、教師の役割、授業法・教室活動について、言語学習の性質について、文字学習について、コミュニケーション志向について、言語学習と文化の関係についての 7 領域にわたる BALLI を用いる調査した。和田(2007)はスリランカにおける大学の日本語学習者のビリーフの特徴を明らかにするのが目的である。調査の質問項目は、外国語学習の適性、言語学習の本質、言語学習の困難さ、言語学習のコミュニケーションストラテジー、言語学習の動機、教師の役割、授業法・教室活動、媒介語、言語学習と文化の関係についての 9 領域にわたる。調査の結果、スリランカの大学における日本語学習者は、コミュニケーション重視の教授法や教室活動、シラバスを望み、教師依存の傾向が強く、教師に強い信頼と期待を寄せているということが明らかになった。

また、現実と学習者のビリーフにはギャップがあり、それを埋めていくことが今後のスリランカにおける日本語教育の改善の鍵になると思われる。高崎(2014)は、メキシコにの初級日本語学習者の上達させたいと考える言語能力・技能と、学習者のビリーフについての特徴を明らかにすることを目的としている。上達させたい言語能力では、会話が最も高かったが、その強さの程度や会話以外の言語・技能の希望は地域や学校種別によって異なった。ビリーフ調査で見いだされた特徴は、教室内を問わず日本語での会話や交流を楽しみにしていること、聴解や話す活動が好むが、語彙た読解等の文字を行動対象とする学習指向は低いことという結果が出た。

佐藤は、台湾大学の日本語学習者に対象し、中国語版 BALLI を用いて行った。台湾日本語学習者は日本語を中程度の難易度の言語ととらえており、4 技能のうち読み書きを比較的容易だと認識していること、また、コミュニケーション志向が強く、教室活動においてコミュニケーション能力重視の活動・授業法を好んでおり、教師には日本語力の確認、訂正、効果的学習のアドバイスの役割を期待していることが明らかになった(佐藤 2007)。

### III. 研究方法

本研究では、研究目的を達成するため、インドネシアの西スマトラ州における日本語学習者のビリーフの調査を実施した。先述した研究設問、インドネシア共和国の西スマトラ州パダン市とブキッティンギ市において、調査を行った。調査は、西スマトラ州の 4 つ大学で専攻として日本語を学んでいる西スマトラ州のパダン州立大学・ブキッティンギのアグスサリム外国語学校・ブンハッタ私立大学およびアングラス大学の学習者の 201 人を対象とし、1 年生と 2-4 年生は 2 つグループに分かれる。本研究で、日

本語専攻大学生のビリーフを明らかにするため、1年生と2-4年生に分けた理由は、1年生のビリーフは、高等教育で日本語学習経験がほんのわずかしかないため、少なくとも1年以上高等教育で学習経験がある2-4年生の学習者のビリーフと分けて、考察した方が良いと考えられる。

研究に活用した調査は、個人情報アンケート、Horwitz (1988) が開発したBALLI (Belief About Language Learning Inventory)、また自由記述質問表を用いる調査した。

回答者は、主に3つの部分から構成されたアンケートに回答した。1つ目は、回答者の背景にある情報を収集するために、性別、大学、日本語学習期間、日本語能力試験などの個人背景情報すなわちフェイスシートを配置した。2つ目は、先述したBALLI質問紙からなるパートである。質問は、言語学習の困難さ(6項目)、外国語学習の適性(9項目)、言語学習の本質(8項目)、学習とコミュニケーションストラテジー(8項目)、言語学習の動機(5項目)の5領域34項目からなるもので、各質問に「1. 強く同意する」「2. 同意する」「3. 同意も反対もしない」「4. 反対」「5. 強く反対」の5段階の中から自分の考えに近い段階を選ぶものである。データ解析の目的のために、1-5までプリコーディングした。

2つの項目が異なる応答スケール(項目4と14)を持っている。項目4は、日本語の難易度についての質問「日本語は(1) とても難しい言語(2) 難しい(3) ふつう(4) 簡単だ(5) とても簡単だ」。また、項目14は、日本語学習についての要する期間の質問「日本語を習うのに一日一時間かけたら上手に話せるまでにどのぐらいかかるか(1) 1年以下(2) 1-2年(3) 3-5年(4) 5-10年(5) 一日一時間ではできない」。BALLIの調査は、言語学習についての学習者の認識を識別するので、それはアンケート全体の総合計スコアで考えない。この項目への応答は、別々に処理される。

#### IV. 調査結果の分析

##### 1. 言語学習の困難さ

BALLIの調査項目3、4、6、14、24、28は、外国語学習の一般的な困難さと学生の学習している言語の特定の困難さについて調べるものである。BALLIの言語学習の困難さについての項目の回答割合を分析して、西スマトラ州の日本語学習者(1年と2-4年)の言語学習の困難さについてのビリーフを示すことができる。各言語学習者の中では、言語学習の難易度について非常に異なる評価が存在する。西スマトラ州の大学生の1年生は、日本語学習について、中程度難しい言語と思い、上手になるまで1-2年以下で十分と考えた。これは2-4年に比べて楽観的な言語学習のビリーフを示した。しかし、1年の回答者がこのようなビリーフを持っているのは、言語学習に必要な時間を想像できず、日本語学習の困難さを過小評価しているものと思われる。一方、西スマトラ州の大学生の2-4年生は、日本語学習について、難しい言語だと思い、上手になるまで1-2年ではなく、もっと長い期間(3年間以上)かかるというビリーフを持っている。1年に比べると、2-4年の回答者はそんなに楽観的ではない。また、1年

と 2-4 年の回答者は、日本語学習について、読み書きのほうが易しいというビリーフを持っている。1年と2-4年の回答者ともに、差の違いはあれども、基本的には日本語学習について楽観的に考えているということがわかった。言語学習者は、言語学習について「比較的簡単」と「すぐに上手になるように」というビリーフを持っていた場合において、思ったより学習が進まない不安になると思われる (Horwitz, 1988; 286)。西スマトラの日本語学習が、スケジュール通りに進んでいることは考えにくく、多くの日本語学習者達が、不安を抱いていると考えられる。

## 2. 言語学習の適性

BALLI の調査の項目 1、2、10、15、22、29、32、33、34 は、言語学習に必要な適性や、成功した言語学習者と不成功におわった言語学習者の特徴について示している。したがって、これらの項目は、言語学習における、スキル達成のための潜在能力に関連する。内訳は、項目 2、15、34 は「言語学習における特別な能力」について示し、項目 1、10、22、29、32、33 は、「成功した言語学習者」と「不成功におわった言語学習者の特徴」というように分けられる。

この領域の回答結果から、1年と2-4年の西スマトラ州の日本語学習者は、一般的に外国語の適性や言語学習のための特殊能力の存在を認めた。その回答結果から、西スマトラ州の日本語学習者は、自分は才能がある言語学習者ではないという自己認識を示しているが、そんな特殊能力がなくても、言語学習は誰でもできるはず、というビリーフを持っている。つまり、言語に関する特殊能力がなくても、上手に日本語ができるようになると考えている人が、大半を占めていることがわかった。しかし、楽観的な1年生より、2-4年生の回答者らは、自分の言語学習能力に対して否定的な評価を持つ傾向にあり、ビリーフの側面からみると、1年目の楽観性がなくなっていることもわかった。

次は、「成功した言語学習者」と「不成功におわった言語学習者」の特徴について分析してみたい。外国語学習における成人と子どもの差異、男女の差異、個人差については1年と2-4年グループがほぼ同じ意見をもっていることがわかった。成人と子どもの差異についての項目1「子どもは大人よりも外国を習得しやすい」は、両グループともに71%で、賛成が多い。それに対して、男女の差異と専門分野の差異については、両グループとも賛成多数とは言い難い。ここで注目したいのが、「成人と子ども」の差異に関してである。「子どものほうが言語習得は速い」といった一般的に抱かれたビリーフに賛成しているが、男女差異と専門分野差異については、一般論に反しているビリーフをもっていることが見て取れる。

## 3. 言語学習の性質

BALLI の調査の項目 8、11、16、20、25、26 は、言語学習の性質について示している。内訳は、項目 8、11 は文化交流の役割について示し、項目 25 は言語学習と他の学科の差異について示し、また項目 16、20、26 は日本語で重視する学習分野について、というように分けられる。

西スマトラ州の日本語学習では、日本語で最も重要な学習について、語彙、次は文法学習、そして自国語から翻訳するという順番があることが分かった。Horwitz(1988 ; 289)によると、「語彙や文法は言語学習に一番重要だ」というビリーフが言語学習に持たれている場合、語彙と文法学習に偏りすぎてしまう傾向がでてきてしまい、他の学習方法を無視してしまうことがある。しかし、西スマトラでは、映画やアニメなど日本の文化を理解したいというビリーフも持ち合わせており、会話スキルはつかないまでも、聞き取りスキルなどを補っていると考えられる。

#### 4. 学習とコミュニケーションストラテジー

この領域であつかう項目は、言語学習の過程、学習ストラテジー（項目 17・21）とコミュニケーション・ストラテジー（項目 7・9・12・13・18・19）に関するビリーフの把握を目的とする。また、この領域は言語学習と直接的な関係がある（Horwitz, 1988 ; 289）。

これらのことから、西スマトラ州の日本語学習者は、日本語に関して、言語使用の正確さよりも、推測などの学習ストラテジーを用いながら、いかにコミュニケーションがとれるかという点を重視している、ということがわかった。回答者は、会話のときに、間違ってもかまわなくて、日本語学習の誤りに対する寛容性が高いことが考えられる。しかしながら、項目 12「会った日本人と日本語の練習をするのは楽しい」では賛成派と「どちらでもない」という回答が 1 年と 2-4 年の両グループで半々であることが読み取れる。項目 18「他の学習者と日本語を話すのは恥ずかしい」で、1 年と 2-4 年の回答者は、「恥ずかしい」と「恥ずかしくない」と思う回答比率がほぼ同じであるが、話すとき「恥ずかしい」を選択した 1 年の回答者が（44%）、2-4 年の回答者（37%）より多い。以上の結果から判断する限り、西スマトラ州の日本語学習者は、コミュニケーション志向の意識を持ちながらも、実際の行動の間にギャップが存在しているといえる。

#### 5. 言語学習の動機

BALLI の調査項目 27, 30, 31 は、日本語学習に関しての希望と機会に関連する。下の表（4-5）に日本語学習の動機についての西スマトラ州の日本語学習者の 1 年と 2-4 年の回答を表している。

日本語学習に関する動機については、日本語能力が就職の際に関係する、という回答者が多い（表 4-5）。1 年の回答者の賛成した比率は 85.6%（平均 1.67）であり、2-4 年の回答者は 69.5%（平均 2.03）である。つまり、1 年の回答者は、日本語能力と就職の関係がある気持ちが 2-4 年の回答者より強かった。つまり、日本語スキルを活用して就職を得たいという動機が推定できる。また、西スマトラ州の日本語学習者が、日本人を知るための意欲も高い。項目 31「日本語を習えば、日本人をもっと理解できる」で、1 年の回答者は 86%（平均 1.81）が賛成し、2-4 年の回答者が 69%（平均 2.14）が賛成している。1 年のグループが日本人を知るための動機が強かった。その上、両グループは、「インドネシア人にとって、日本語はそんなに大事な外国語ではない」に「どちらでもない」と回答している。これらの結果からすると、西スマトラ州の日本語学習者は、日本語学習に

関しての動機は、日本語能力と就職の関係といった職業獲得へのツールとしての考え方も、「日本人を知る」という興味関心の面も高いことが伺える。

## V. 結論と今後の問題

本研究で問うべき研究目的は、近年、日本語学習熱が高まるインドネシアにおいて、ジャカルタ以外での日本語学習に関する研究が乏しいことから、(1) 西スマトラ州を事例にとり、大学学部レベルにおける日本語学習者のビリーフを理解することを第一の目的とした。(2) さらに、西スマトラ州の日本語学習者を1年生と2-4年生にわけ、初学者のビリーフと一定程度の既習者のビリーフを分けて分析し、比較することで、西スマトラ州の日本語学習のあり方について、立体的に把握しようとした。ビリーフについては既に述べた通り、本研究では、「言語学習について学習者が持っている信念、言語学習観」と定義している。

### 1. 西スマトラ州における日本語学習者（1年と2-4年）の持っているビリーフ

BALLI の「言語学習の困難さ」の分析からわかったことは、西スマトラ州の日本語を専攻している大学生、1年生と2-4年生の間にある最も大きな回答の差異は、特に1年生の学習者は、日本語学習に関して楽観的であるが、日本語学習の困難さを過小評価していることが示された。一方、2-4年の学習者は、日本語学習に関してさほど楽観的ではなく、日本語学習に必要な時間について、1年生グループよりもっと長い時間が必要だと考える学習者が多い。通常、慣れや理解の深まりとともに、ポジティブに推移していくべきところ、西スマトラ州の学習者は、学習する年月が長くなるにつれて不安や不満感が増加してきているのである。

「言語学習の適性」調査でわかったことは、全ての学習者における共通性は、「言語学習に関する才能がある学習者がいる」と認識する一方、「自分は特別な才能がある言語学習者ではない」という自己認識を示している。つまり、理系に比べると、言語学習には、そのような「特別な才能は必要ない」と考えている学習者がいる。

一方で、「言語学習について、最も重要なのは、語彙、文法学習、自国語から翻訳する」と考えている学習者が多いことであった。「学習とコミュニケーションストラテジー」調査でわかったことは、全員、「学習者が繰り返す練習とカセットやテープや LL 教室で練習する」ということは大切であると認識されていた。これは、いってみれば伝統的な言語学習方法であり、学習者たちの内部で、目的と方法のミスマッチが起こっていると考えて良い。

また、日本語で会話するとき、間違っても、単語を知らないときに推測しても良い。つまり、言語使用の正確さよりも、推測などの学習ストラテジーを用いながら、いかにコミュニケーションがとれるかという点を重視している、ということがわかった。しかし、自身の日本語について「教師や友達、日本人に相談することを恥ずかしい、楽しいわけではない」と回

答している学習者の割合も高いことから、コミュニケーション志向の意識を持ちながらも、実際の行動の間にギャップが存在している。

2. 西スマトラ州における日本語学習者（1年と2-4年）のビリーフの変化を明らかにする。

先述したとおり、西スマトラ州の日本語学習では、日本語で最も重要な学習について、語彙、次は文法学習、そして自国語から翻訳という手順を重視しているが、Horwitz(1988 ; 289)によると、「語彙や文法は言語学習に一番重要だ」というビリーフがある場合、語彙と文法学習に偏りすぎてしまう傾向がでてきてしまい、他の学習方法を無視してしまうことがある。1年生は、言語学習について楽観的であって、言語の困難さを過小評価している一方、2-4年生は、日本語の難しさを実感しているため、持っているビリーフを変えることになると考えられる。つまり、文化への興味の高さと、方法論の困難さや面白くなさが、ミスマッチであるため、2-4年の学生の不満が出てきているのではないか。言語学習の適性の調査でわかったことが、日本語学習を始めることにおいて敷居は低く、後になって苦労する、自信を失う、という結果になっている。

ビリーフ調査の結果と学習者の背景をすりあわせて検討してみると、まだ発展途上の状態であることがわかる。学習者自身、文化に興味があるが、方法として重視しているのが、比較的伝統的な、教授法であったり、学年に応じた学習方法論が、教育機関側から提供されていないということもわかった。

これに対しては、教師や教育機関側が、学習者のビリーフを理解し、どのような教材や教育内容を提供したらいいのか、検討する必要があるだろう。

## 参考文献

- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS についてー香港4大学アンケート調査からー」 『日本語教育』 104号、pp. 69-78、日本語教育学会。
- 片桐準二 (2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Beliefs」 『国際交流基金紀要』 第1号、85-101、国際交流基金。
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の状況 2012年度 日本語教育機関調査より』 くろしお出版。
- 佐藤紀美子 (2007) 「台湾人日本語学習者のビリーフス」 『留学生教育』 第12号、19-29。
- 高崎三千代 (2014) 「メキシコにおける日本語学習者の特性ービリーフ調査結果を中心にー」 『国際交流基金紀要』 第10号、23-38、国際交流基金。

- 古川嘉子 (2007) 「インドネシアの日本語教育」  
(<https://www.jpfr.go.jp/j/urawa/about/world/img/13/furukawa.pdf>)
- 和田衣世 (2007) 「スリランカ大学生の言語学習ビリーフから日本語教育の改善を考える」 『国際交流基金紀要』 第3号、13-28、国際交流基金
- Alexander, P. A., & Dochy, F. J. (1995). Conceptions of knowledge and beliefs: A comparison across varying cultural and educational communities. *American Educational Research Journal*, 32 (2), 413-442.
- Ellis, K. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press
- Fujiwara, T. (2012). Beliefs about language learning of Thai students learning Chinese and Japanese; Relationships with past learning experiences and target language variations. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching* 9 (2):170-82
- Henter, R. (2014). Affective factors involved in learning a foreign language. *Procedia-social and Behavior Sciences* 127:373-78.
- Horwitz, E.K. (1985). Using student belief about language learning and teaching in the foreign language method course. *Foreign Language Annals*, 18 (4), 333-340.
- Horwitz, E.K. (1988). Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden and J. Rubin (Eds). *Learner strategies in language learning*. (pp.119-129). Hemel Hempstead; Prentice Hall.
- Horwitz, E.K. (1999). Cultural and situational influences on foreign language learning. *System* 27. 557-576.
- Kern, G. (1995). Students' and teachers' beliefs about language learning. *Foreign Language Annals*, 28 (7), 71-92.
- MacIntyre, P. D. (2000, February). *Affective processes in second language learning*. Paper presented at Temple University Japan, Distinguished Lecturer Series. In Peacock, M. (1999). Beliefs about language learning and their relationship to proficiency. *International Journal of Applied Linguistic*. 9(2), 247-265.
- Oh, M.J. (1996). Beliefs about language learning and foreign language anxiety; a study of American university students learning Japanese.
- Pajares, M. F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: cleaning up a messy construct. *Review of Educational Research*, 62 (3), 307-332.
- Peacock, M. (1999). Beliefs about language learning and their relationship to proficiency. *International Journal of Applied Linguistic*. 9(2), 247-265.
- Riley, P. (2006). The beliefs of first year Japanese university students toward the learning of English. Dissertation. Faculty of Education. The University of Southern Queensland, Australia.
- Truitt, S. N. (1995). *Anxiety and beliefs about language learning: A study of Korean university students learning English*. Unpublished doctoral dissertation. University of Texas at Austin. In Riley, P. (2006). The beliefs of first year

Japanese university students toward the learning of English Dissertation.  
Faculty of Education. The University of Southern Queensland, Australia.

Young, D. J. (1991). Creating a low anxiety environment: What does the language anxiety research suggest? *Modern Language Journal*, 75, 426-436.